

Title	Gerald Strauss, Historian in an age of Crisis : the life and work of Johannes Aventinus (1477-1534)
Sub Title	
Author	坂口, 昂吉(Sakaguchi, Kokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.1 (1965. 6) ,p.144- 147
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19650600-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Gerald Strauss, *Historian in an Age of Crisis—The Life and Work of Johannes Aventinus (1477-1534)—*; Cambridge Mass. 296 p. 1963

坂 口 昂 吉

Johannes Turmayr *Aventinus et Annales ducum Boariae (Bayerische Chronik)* 八巻の大作によつてバヴァリアの<ロゲト>とも呼ばれている人文主義者であり歴史家である。彼に就いては、すでに E. Fueter, *Geschichte der neueren Historiographie*, 3 Aufl., München und Berlin, 1936. S. 194-197 が、一時代を劃する歴史家として評価しているが、ここでは W. K. Ferguson, *The Renaissance in Historical Thought*, Cambridge Mass., 1948. p. 29-58 により、本書の内容紹介に入る前に、従来の評価についてのべてみたい。

Ferguson によれば、北方ルネサンスの歴史家たちは、二つのライト・モティーフとして、世俗国家中心の敘述、学芸の古代末における没落と当代における復活というみかたをイタリア・ヒューマニズムから共通に受けついだ。しかしその継受のしかたの特徴に従つて三種の型にわけられるという。第一は世俗国家中心の敘述に力点をおいた人々で、*Patriotic Historians* と呼ばれる。第二は宗教及び学問についてスコラの思弁を捨て原典にかえるという方向を

とり、学芸の古代末における没落と当代における復活というみかたを強化した人々で、*Erasmian Humanists* と呼ばれる。第三は、宗教改革後、この学芸の没落—復活というみかたに神学的基礎を与えたプロテスタントの歴史家を主とする。そしてアヴェンティヌスは、この三種のうち第一の *Patriotic Historians* の代表者の一人とされている。

また Ferguson によれば、この傾向の歴史家のうち、フランスのヒューマニストたちが個別的な世俗国家中心というイタリアの原型に比較的忠実であつたに反し、ドイツでは顕著な相違がみられるという。それは、イタリアではコムーネ、フランスでは王権という国民主義的歴史敘述の個別中心があるのみであつたが、ドイツでは諸侯国の上にさらに普遍的統一原理としての神聖ローマ帝国があつたため、歴史家たちはそのいずれにも一方的に組しえず、国家よりも民族の敘述に国民感情のはけ口をみいだしたためであるといわれる。アヴェンティヌスのバヴァリア年代記が、世界史を背景にしドイツ民族の歴史となつたのもこの意味である。それは普遍性を保つため、イタリア・ルネサンスの歴史家たちが捨てさつた中世の世界年代記の特色、即ち神学的意味を内包した四帝国(バビロニア・ペルシア・ギリシア・ローマ)の併列的敘述を踏襲したという点に古さをもつ。しかし、ベローススによつてノアの息子トウイスコをゲルマン民族の祖とし、タキトゥスに原始ゲルマンの優秀性を求め、カール大帝によるローマからゲルマンへの *translatio imperii* を高く評価している点に中世的普遍主義をこえた国民感情があらわ

れているし、またその反教皇・反聖職者的中世敘述においてプロテスタント主義に組するものとされている。

上記の如き従来の評価に対し、本書の著者 Strauss は若干の修正を加えているが、特にアヴェンティヌスの独自性を新たにみいだそうとはしていない、敘述は伝記の体裁をとり、その考証は、Johann Turmayrs genannt Aventinus Sämtliche Werke, München, 1880-1908, 6 Bde. 及び Caspar Brusch (1551) Hieronymus Ziegler (1554) の *vita* によつて刻明になされている。しかし著者はアヴェンティヌス個人及びその業績の偉大さを示そうとしていない。むしろ彼を獨創性を欠いた二流の人物といつてはばからない。著者の意図するところは、アヴェンティヌスという歴史家のうちにとらえられた十五世紀末から十六世紀にかけてのドイツ―広くはヨーロッパの危機である。即ちヒューマニストとして当時の教養要素を広く吸収し、また誠実な道徳的態度の故にある意味では宗教改革とも関係のあるこの歴史家を重くつつんでいたムードをとらえようとしているのである。

著者はかかる意図をもつて、まずアヴェンティヌスがインゴルスタット、ウィーン、クラカウ、パリと遊学し、やがてバヴァリア侯の子息たちの家庭教師となるまで、即ちヒューマニストとしての修業時代を追つてゐる。そこでは特にコンラッド・チェルティスによつてタキトゥスを始めとするドイツ史の史料的研究への興味をかきたてられたこと、及びルフェーブル・データールによりスコラの思弁を捨て、單純な直觀的神学にひかれたことの重要性が指摘されてい

る。

しかし、かかる教養の吸収と素朴な道徳性の涵養のほかに、将来のアヴェンティヌスの仕事の形成に重要な影響を及ぼしたのは、一四五三年コンスタンチノープル攻略以降じわじわとヨーロッパの中心部に食いつてくるオスマン・トルコの脅威であつた。しかもこの危機を前にして無数の諸侯領・教会領に分裂した帝国の政治的無力と道徳的頹廢は、当時の人文主義者たちを強くとらえていた占星学的予兆と共に、彼の心に重くのしかかつたといわれる。

次いで著者は、「バヴァリア年代記」の内容について吟味する。即ち同書第一巻においては、ギリシア・ローマの文献にみられるバヴァリア記述を中心にして、ローマ以前の三帝国の敘述がある。ここでは記述は並列的で、年代順よりも歴史的經驗の相似性に注意がむけられている。第二巻はローマ帝政の記述から始まりゲルマンのローマ帝国に対する勝利とキリスト教のヨーロッパへの普及が描かれる。第三巻は西暦五百年からカール大帝の加冠までを扱う。しかし並列的記述の範圍は、フランク、バヴァリア、東ゴートにせばめられる。第四巻はカール大帝の業績の称揚と、その死後における帝国の分裂解体を扱う。第五巻はオットー大帝から始まりカノッサの屈辱にまで及ぶ。しかしこの巻より、アヴェンティヌスは著作への興味を失つたらしく、形式的敘述がめだつという。第六巻から八巻までは、バヴァリア地方史が中心となり、系図的敘述がふえ、一般史については十字軍、メンディカント、フリートリッヒ二世等につき断片的敘述がみられるにすぎなくなる。そして年代記は、アルブ

レヒト四世の登位をもつて終つてゐる。

ここにみられるアヴェンティヌス歴史觀の特色は、単純な自然法的道徳規範をもつて歴史の興亡に裁きを下していることである。即ちいずれの民族においても、初期の質実剛健で道徳的にすぐれた時代が繁栄をもたらし、その榮華に心を許して惡徳にふけるところから民族の内的崩壊がおこり、やがて新興の外民族による交代がおこるといふのである。彼はかかる循環的考えをツキジデス、殊にタキトゥスよりえたのであつた、この觀点からみると、新興ゲルマンの清純さと、その腐敗せるローマからの *translatio imperii* は彼にとつて光榮ある事實と思われた。しかし当時のローマとゲルマンの關係は、彼に現在のゲルマンとトルコの關係を思いおこさせた。没落期のローマにみられる君主の決断を欠く統治、不当な利得をむさばる官僚・下役人、貪欲で不品行な聖職者、階級間の争い、社会不安におののく民衆の苦しみ等は、そつくりそのまま神聖ローマ帝国の現状をうつすものと思われた。このためアヴェンティヌスは、年代記第三卷の序文においてのみならず、多くのパンフレットを書いて、トルコの脅威を免れるために帝国の軍事力と道徳力の回復を力説した。しかしこの訴えは一般にうけ容れられず、むしろプロテスタント的傾向に立つものと疑われた。ここに彼は、すべての予言者は世にいれられぬという苛酷な歴史の教訓を自ら体験したのである。著者は第五卷以降の敘述が急に衰えていつた原因をここにみている。即ちアヴェンティヌスは、当時の社会における危機の性格を明らかにし、救済策を求むるべく歴史にとりくんだ。しかし彼が非

常な努力の結果みいだしたものは、歴史の循環性から由来する危機の不可避的性格であつた。そしてここに、彼の歴史に対する情熱も衰えていつたといふのである。

アヴェンティヌスはかかる循環的歴史觀に対するアウグスチヌスの反論、例えば再び失われる不安がある限り至福はありえないとか、或は歴史の循環はクリストの十字架のもつ一回限りの意味を失わせるという議論を知つていた。また熱心なクリスト教徒である彼は、このアウグスチヌスの言葉の救済史的意味を否定しはしなかつた。しかし、彼の世俗的歴史に対するみかたが、神学的循環否定論によつて大きく影響されておられるとは思えない。むしろアヴェンティヌスの循環論は徹底しており、ヴィコにみられる螺旋狀の發展という大わくすらないようである。これは著者のいうように、ツキジデス、タキトゥスへの心酔の結果であると同時に、すべての地上的事物に対する自然的なみかたのあらわれであろう。けれどもアヴェンティヌスの歴史觀を古代的なものと同一視することもできないのであるが、全く同一の循環過程といつても未來永劫よりのものではなく、始めもあるし終りもある神意顯現の過程である。アヴェンティヌスが当時の文明の没落をそのまま世の終りと同一視していたかどうかは明らかでない。しかし、彼がそこに、無限の循環過程の一つが終るといふ以上の緊張、即ちほとんど終末意識といつてよいような雲囲氣を感じていたのは確かであると思われる。そしてこの点は、彼の歴史觀における古代的思想をわずかにつつむクリスト教的わく

とみてよいであろう。

最後にアヴェンティヌスの宗教改革に対する態度についてのべてみたい。Ferguson は、彼を反教皇・反聖職者の傾向を顕著に示した点でプロテスタントの線に一致するものとしている。しかしこの点で著者の見解はやや違う。確かにアヴェンティヌスの宗教に対する態度は道徳的傾向が強く、聖職・秘蹟等の評価にとぼしいところがあつたし、またその観点から墮落した聖職者に対し厳しい非難を浴びせた。またトルコの脅威はプロテスタント異端に対する神罰であるという当時の議論に対し、カトリック側の道徳的欠陥こそむしろ神罰の対象であろうともいつている。それ故に彼は、常にプロテスタントではないかと疑われ、一五二八年にはバヴァリア侯ヴェルヘルムにより短期間ではあるが投獄までされている。しかし著者は、慧眼なバヴァリアの宮宰レオンハルト・フォン・エックが、周囲の疑惑もかまわず、アヴェンティヌスに自分の息子の指導を頼んでいるところから、彼のカトリック的立場は明らかであるといっている。そしてアヴェンティヌスは、史上数多い分派的改革運動が、その動機において当をえていたのに見解の狭さの故に何の成果もあげずに終息した例にかんがみ、プロテスタント運動の将来にかけることができなかつたのだという。彼をしてプロテスタント運動に新時代の胎動をみることを妨げたのも、やはり循環的歴史洞察の結果であつたのである。

一般に十五・六世紀は近代の曙とみられているが、この時期の人々が意外に暗い気分閉ざされていたことは、すでにホイジンハが多

彩に描いているところである。本書もまた、アヴェンティヌスという当時の一歴史家をとらえ、循環的歴史観から生じたアナロジーが意外な絶望を生んでいることを示している。この意味で本書は、「中世の秋」に対する一つの裏づけを提供するものといつてよいであろう。

なお著者 Gerald Strauss は、現在インディアナ大学の助教授で、十五・六世紀のドイツ及びスイスの歴史家や地理学者について研究しており、Sixteenth-Century Germany, Madison, Wisc., 1959 のほか American Historical Review, Medievalia et Humanistica に数種の論文を発表している。